# ９．比較帝国論の方法を考える

日時：2010年４月24日（土）13時30分～18時
場所：北海道大学古河記念講堂１階109室

この研究会は、比較帝国論の方法を、具体的な研究を踏まえつつも理論的に考えることを目的とし、科研費基盤研究Ｂ「近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史」との共催で開かれた。出席者は、入れ替わりもあったが計約50名にのぼり、熱心な議論が繰り広げられた。

## 〈1〉木畑洋一（成城大学）「帝国史研究の諸課題：イギリス帝国史研究の視点から」

まず木畑が基調講演を行い、イギリスと日本の植民地統治比較への関心を踏まえつつ、イギリス帝国史研究における論点を、過去半世紀の主要な研究を概観しながら整理した。そして比較を行う手かがりとして、「公式帝国」「非公式帝国」に関する議論、「中心」「周縁」関係、帝国の階層的構造（特にキャナダイン『虚飾の帝国』が論じる中心のエリートと周縁のエリートの協力関係）と重層的差別、といった論点を提示した。また、一部の論者が帝国の平和的支配を強調するあまり省みられなくなってきている暴力の契機や、イギリス人にとっての帝国意識等の問題にも注意を促した。

木畑は講演の最後で「長い20世紀（1870年代～1990年代初頭）」の概念を提示し、19世紀後半の帝国主義時代から20世紀前半の戦間期を経て、脱植民地化と冷戦の終了に至る長いスパンで帝国史・帝国主義の歴史を研究することの重要性を指摘した。また、グローバル化の進む現在を「長い20世紀」に続く時代と捉えることで、歴史研究における帝国・帝国主義研究と国際政治研究におけるそれを架橋する可能性が開けるが、その功罪については慎重に考えていくべきとコメントした。

## 〈2〉松里公孝（北海道大学）「実証史学における帝国論と現代世界分析における帝国論を架橋するために」

次に４名の報告が行われた。松里は、実証史学としての帝国論と現代世界分析としての帝国論の間にこれまで殆ど相互作用がなかったことを問題としたうえで、近年の研究動向によって、両者を架橋する可能性が生まれていることについて説明した。まず、単に社会・経済・民族などの問題の文脈として帝国を見るのではなく、帝国そのもののメカニズム（ロシア帝国の総督制など）に関心が持たれている。また、具体的な国や王朝に限らず、広域的な関係・相互作用としての帝国に関心が広がっている（杉山正明の中央ユーラシア帝国論からネグリ、ハートまで）。国際政治研究でもトランスナショナリズムが注目されている

が、広域的な関係における宗教の重要性など、人文的な要素を入れる必要がある。さらには、前近代・近代の帝国だけでなく社会主義ソ連・中国に帝国概念が適用されるようになったことも、実証史学と現代世界分析の間の障壁を低めている。

松里は最後に、ロシア・ソ連、中国、オスマン帝国・トルコ、インドという４つの地域大国を、「旧帝国」「革命の文脈」「対外政策」「国内体制」「自由化の文脈」の諸項目に沿って、特に宗教と連邦制に注目しながら比較する試論を行った。

### 〈3〉宇山智彦（北海道大学）「帝国と周縁・植民地の関係を比較する方法：統治構造と相互認識」

宇山は、旧ソ連領中央アジアは本格的な独立運動なしに独立したのに対し、東トルキスタンやチベットは独立運動を繰り返しても独立できないのはなぜかという関心と、英領インド史の研究を読みながら気づくことに基づいて、帝国研究への問題意識を述べた。そして、帝国を語ることが持つ倫理的問題に向き合いつつも一方的に善悪を決めつけず、各帝国の周縁・植民地支配を統治政策・相互認識・時間的変化の各側面から比較する方法を提起した。

具体的には第１に、諸帝国を同化主義的な国とそうでない国に単純に分ける議論は生産的でなく、同じ帝国でも地域や時代によって、異化／分類、同化、介入、放置のあり方に違いが存在したこと。第２に、帝国の周縁・植民地認識には内地社会のあり方（階級制・伝統主義の強弱、政府と知識人の関係など）が、周縁・植民地の帝国認識には現地の利害関係や概念が影響したこと（以上の議論は、オリエンタリズム論の修正と関連）。第３に、帝国は「文明化」の使命を掲げるが、帝国と文明の中心のずれや、文明的価値と帝国政治の実態のずれがむしろ帝国統治の正統性を揺るがしたこと。第４に、オスマンや清などは柔構造の専制帝国とされるが、外圧を受けつつ近代国民国家に転生する際、旧帝国の体制が反面教師として認識され、後継国であるトルコや中国は逆に多元性の許容度の低い国になったこと、である。

### 〈4〉長縄宣博（北海道大学）「帝国を映す鏡としての人間の移動：基盤、ネットワーク、媒介者」

長縄は、19世紀後半から20世紀初頭のメッカ巡礼に着目し、グローバル・国家・ローカルという３層の相関関係を通して、越境するムスリムと帝国について論じる可能性を示した。

具体的には第１に、メッカ巡礼の大衆化が鉄道網や汽船航路の開拓によって生じ、それが国境管理や防疫体制の確立といった国際秩序のインフラ整備と相互作用を起こしつつ進展した点。第２に、諸帝国が膨張することにより、西欧起源の近代（教育システムや女性

道徳など）が拡散しムスリム地域が内部化されると共に、ムスリム世界そのものがネットワーキングの拡大によって諸帝国を内部化していくという「二重のグローバル化」が生じた点。第3に、ムスリム聖職者を組織化することによる地方統治、巡礼者の外交的役割、パレスチナ・シリアでの欧米・ロシア系学校による教育、ロシア・ソ連の外交官として活躍したムスリム、といった事例に見られるように、帝国と現地社会や外国の間に媒介者が存在した点である。

長縄は以上の考察より、①変化する国際秩序に対して各帝国がどう対応したか、②メッカ巡礼等によるネットワーキングがローカルなムスリム社会に何をもたらしたか、③帝国と現地社会の媒介者として個々のムスリムがどのような活動をしたか、という3側面から帝国を比較することを提案した。

### 〈5〉秋田茂（大阪大学）「帝国の脱植民地化の比較史：国際秩序論との関連で」

秋田は、グローバルヒストリーと世界システム論の立場から帝国の脱植民地化を比較する視点を提示し、日本・イギリス・ソ連のケースを取り上げ、旧植民地の独立時期、脱植民地化の難易度、植民地責任といった問題群に関し様々な相違が生じる構造を論じた。

秋田は特に南アジアに注目し、この地域の「権力委譲型」脱植民地化が相対的に早い時期に、かつスムーズに実現し、しかも歴史認識等の問題が生じなかった点を指摘した。その要因としては、イギリス帝国へのコラボレーターとしての現地エリートが独立後のガヴァナンスをも支えたこと、コモンウェルスへの残留とスターリング残高の保有、コロンボプラン等の経済援助、といった点が挙げられる。他方日本帝国の場合は、敗戦により強要された意識せざる脱植民地化が進み、歴史認識の問題が後を引いたが、韓国・台湾でのコラボレーターの存続や、満洲での経済的遺産の継承という点では、イギリス帝国との比較可能性がある。ただし脱植民地化の過程は、こうした本国・植民地間の二者関係を超えた文脈――冷戦体制の構築と変容、パクス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへのヘゲモニーの移行、非同盟運動の興隆といったグローバル・レヴェルの変化――で理解する必要がある。

## 〈6〉コメント・質疑応答

以上の報告に対し4名のコメンテーターより意見が提示された。川島真（東京大学）はコラボレーターや媒介者について、帝国に制度的に組み込まれていたのか結果的に利用されただけか、フリーハンドを与えられていたか否かなどを区別して議論する必要性を指摘し、また日本帝国の位置づけについて議論を深めるべきだと述べた。粟屋利江（東京外国語大学）は、家族法や女子教育、セクシュアリティなどのジェンダー論から植民地統治・脱植民地化をとらえる視点を提示したほか、インドにはムガル帝国の歴史があるにもかか

わらず、現在の歴史認識の中では古代インド文明の方が重視されていることを指摘した。守川知子（北海道大学）は、イランのように帝国でも植民地でもなかった地域の観点から帝国像と帝国の定義を問い直す可能性や、イギリスなど旧帝国による在外自国民保護政策という論点を挙げた。古矢旬（東京大学）は、かつてよく使われた「米帝」という言葉は何だったのかという問いかけをしたのち、元来辺境に位置していたアメリカが、国際的パワーになった時は既に通信・輸送網が世界に広がっていたため辺境性を意識しなかったことなど、テクノロジーの発展の重要性を指摘した。

その後のフロアをまじえた議論では、帝国が対外政策のためにナショナリズムを利用するなど国民国家形成と帝国が同時に存在したことの意味や、帝国主義と帝国性の違い、EUを帝国として論じることができるのか否かなど、多岐にわたる論点が出された。

帝国は極めて幅広い概念・現象であるだけに、今回の研究会でも、統一した基準で帝国を論じることの難しさが改めて浮き彫りとなった。しかし、多くの報告者・コメンテーターが、中央と現地社会を結ぶコラボレーターないし媒介者に着目して帝国を比較する視点や、帝国崩壊後の国家再編や脱植民地化を具体的に比較する議論を提示したことから、帝国の構造と変化の両面にわたって比較研究を進めるための一種の共通認識が生まれたように思われる。